愛知工業大学研究報告
第23号A　昭和63年

愛　と　小　説

――『クレール』を読む――

梶　川　　忠

Amour et Roman

— une Lecture de *Claire* de Chardonne —

Tadashi KAJIKAWA

Romancier du couple, Jacques Chardonne (1884-1968) examinait les multiples variations de la météorologie conjugale. L'amour inscrit dans la durée est un sentiment beaucoup plus vrai et riche que la passion. *Claire* (1931), un de ses plus célèbres romans, traite l'amour absolu que la femme puisse donner à l'homme. Cette oeuvre se situe à l'opposé d'*Eva* qui la précéde. Et à mon avis, elle a pour objet latent une révélation de la production romanesque.

普通の小説が主要なテーマとして取り扱っている青春時代ではなく，それが終ったところからジャック・シャルドンヌ（Jacques Chardonne, 1884-1968）の小説は始まっている。拙論で論じることになる『クレール』（Claire, 1931）の主人公ジャンも，自分の青年時代がもう完全に過ぎ去ったことを認めている。

> 私は二十五歳までは子供だったが，思想も，苦悩も，その頃非常に重要だと思った孤独者の感情さえも，何一つ残ってはいない。別の人間が完全に取って代わったのだ。しかしたとえ若者がまったく消え去ったにせよ，その時代がなかったなら，私は今の私にはなっていなかったろう。

> Rien n'a survécu de l'enfant que j'ai été jusqu'á vingt-cinq ans, pas une idée, pas une souffrance, ni même une de ces émotions de solitaire, que j'ai cru en leur temps si importantes. Un autre homme a tout remplacé. Mais si le jeune homme a entièrement disparu, sans lui, je n'aurais pas été ce que je suis. (p.69) [1]

つまり青春時代のロマンチックなものをすべて失った人間が，主人公になるのである。だからシャルドンヌの小説ではほとんど事件はおこらず，まるで実人生のように淡々と書き進められてゆく。

ほとんどが夫婦愛をテーマとする彼の様々な作品のうち，『クレール』にはどんな特性があるのか。この作品は，前回の拙論[2]で取り扱った『エヴァ』（1930）に続くばかりでなく，表裏をなす作品である。ほとんど同じ設定で，ただ光線のあて具合が異なっているといえようか。ともに理想的な夫婦関係を求めつつ，最終的には妻を失う男の手記という体裁である。『エヴァ』は，自分の愛する妻の幸福のみを願った男の日記であった。女のためによかれとする彼の行為は，ことごとに裏目に出，二人はともに不幸におちいり，最後には妻も男の許を離れてしまう。

それに対して『クレール』の女主人公クレールは，『エヴァ』と同じく男の手記というスタイルをとっているので，必ずしも明確な像を結ばない淡い存在なのだが(これがシャルドンヌが意識的に採用した，一人の人間を理解することの困難さを示す手段であることはいうまでもない)，際立った美しさをもつ，理性的で道徳心の強い女性になっている。いわば男の理想の女であり，その分非現実的な女でもある。

だから『クレール』は，『エヴァ』の最後に記された以下の文章を実現した小説であるといえよう。

> 私はある小説を構想している。一人の女が一人の男にあたえうる幸福，この世でただ一つの幸福を表わしてみたい。私には他のことは書けそうにないのだ。
>
> J'ai l'idée d'un roman. Je veux montrer le bonheur qu'une femme peut donner à un homme, le seul bonheur qui soit au monde. Il me semble que je ne saurais pas décrire autre chose.(3)

拙論の第一章では，この二人の愛が検討される。互いに内に秘めた，落ちついてはいるがもろい愛は，一つの試練を経なければ，もっと強い結びつきがえられない。強い結びつきを極端に恐れる主人公が，愛の第一段階から第二段階へ移る過程が分析される。

第二章では，その二人の関係を綴っている手記という点で，小説を書くという行為が検討される。愛をえて突然作家的使命を自覚した主人公が，どのようにそれを達成するかが問題になる。そしてこの点に関しても，愛と同じく二つの段階のあることが示される。

この二つの点で，『クレール』という小説が，シャルドンヌの周到な意図のもとに，きわめて整合性をもって書かれた小説であることがわかるのである。

I

一人の男が愛する女を手にいれる。するとその途端，男は恐怖にとらわれる。ひょっとしたら変わってしまうのではないか，いなくなってしまうのではないか，死んでしまうのではないか。「わたしは愛するもののはかなさを知っている」。《Je vois la fragilité de ce que j'aime.》(p. 7) または「クレールは，やはり愛らしいかもしれないが別の女に変ってしまうかもしれない。」《Claire peut se transformer en d'autres femmes encore aimables》(p. 8) という年ふりた認識をもちながらも，運命的に女性に魅きつけられてしまう。

ましてや「人生を正当化してくれる類まれな女性の一人」《une de ces raretés humaines qui justifient la vie.》(ibid.) として，ほとんど誰の目にも触れることなく成長した女性なのである。まるで真空パックされたように。歓迎されざる子供として生を受け，母親の口走る父親＝男への呪詛を糧としている。心に男への嫌悪を秘めてはいるが，肉体と精神の美しさを完全に備えた女に，様々な接近が試みられたけれど，主人公以外誰も成功しなかったのである。

このような女が偶然（主人公の側からは意識的である）に出会った男を愛してしまう。それは，ちょうど生まれたばかりの雛が，初めてみたものを母親と錯覚する擦り込み現象のようなものである。女はその唯一の男を男と認識することになる。つまり女主人公クレールは，その男のために生きる絶対的な愛の持ち主であるが，男の理想というべきこの女は，この世のものともいえない非現実的な存在でもある。いわば絶対不変の愛情は時間を越えるものであり，移ろいゆく人生に醒めた目をむける主人公は，憧れると同時に避けたくもある。

無菌状態の女と異なり，ボルネオに入植して成功した男は，その地で娘をなくし，「妻が目の前で崩れるのを見た。」《Je l'ai vue se défaire sous mes yeux.》(p.44)過去をもつ。互いに一度は愛しあった夫婦が，フランスとは極端に違う風土や子供の死によって，心を離してしまう。「私の妻は悲しみを理解してくれなかったし，私の苦しみは彼女には冷酷にみえたのだ。この時から彼女は私に対し奇妙な反感をいだいた。」《Ma femme a mal compris mon chagrin et ma douleur lui parut froide. Dès ce moment, elle eut pour moi une singulière aversion.》(ibid.)つまり男と女の結びつきはいつも様々な障害にさらされており，主人公には不変の関係など信じられないのである。

さらに妻は極端に変ってしまった。「私を喜ばせた少女のどんな特徴も妻の中には残っていなかった（……）」。《Aucun trait de la jeune fille qui m'avait plu ne subsista dans cette femme (. . . .)》(ibid.) だから妻がシンガポール湾に身を投げたときにも，「屍が海に落ちただけだ。」《c'était pour moi un cadavre qui tombait à la mer.》(ibid.) としか思えなかったのである。

こうして主人公は愛に臆病に，変化を怖れ，死を厭う人間としてフランスに戻ってきたのである。だから彼は結婚を望まない。この社会制度は彼の人生観とまったく相容れないのだから。彼にとって愛と

は愛し合った瞬間を固定することである。写真に収めたり，虫ピンで蝶を保存するようなものである。だがそこには生がない。

だから二人の愛は，運命的なものではあっても，決して激しく自由奔放なものではない。心静かに，きわめて理性的なものである。男は，自分のために生きている女だからこそ，相手に影響を与え，変化を及ぼすのを，ちょうど完全な彫刻に一点の傷もつけられないように，恐れている。女は，主人公の手記という体裁をとっている以上厳密には不明なのだが，ロマンチックな感情を欠き，忍耐強い。

> 彼女は私の生活や過去についてたえて質問したことはないし，私が他の女に興味をもつかもしれないなどとは思いもよらないらしい。分かち合った真実の愛は不安を知らない。愛は自分の力を知っている。嫉妬はもっとも多くの場合悪習である。私はクレールが知った最初の男である。彼女には疑いがない。

> Elle ne me pose jamais de questions sur ma vie ni sur mon passé et ne semble même pas se douter que je pourrais m'intéresser à une autre femme. Le véritable amour partagé ignore l'inquiétude ; il sait sa force. Le plus souvent, la jalousie est une mauvaise habitude. Je suis le premier homme que Claire ait connu ; elle est sans méfiance. (pp.33-4)

こうしていわば付かず離れずの関係になるのであるが，悪くいうなら，二十歳近く年齢の離れた世間知らずの小娘を手玉にとったことになる。相手の無知と優しさを利用して，臆病な恋愛幻想を押しつけるのである。疑似恋愛を楽しんでいる。

しかし互いに距離をとった冷静な恋愛感情を持ちつづけることで，生活を介入させることなく（例えば長い時間一緒にいない），不変の恋愛を維持させられるかもしれない。

そして自分が克己的な努力をすることで，女主人公は時間を超越できるかもしれない。美しい顔面に一筋の皺さえうえつけることなく，止まった時間を生きつづけられるかもしれない。

もちろん主人公は不可能を自覚している。しかし目にみえないような変化を，荒々しい変貌よりも欲するのである。二人が共同生活を送り，普通の夫婦としての日常を受けいれるならば，恋愛は消え去り，クレールは肉体的にも精神的にも自分と無縁の女になってしまうかもしれないのだ。「彼女のもっとも美しいときに，私は死のように恐しい生活から脅迫されているように感じる。」《Dans ses plus beaux moments je sens la menace de la vie, terrible comme la mort.》（p.31）からである。

> この美しい女が，私の愛情をこれ以上自覚させないでくれたらと思う。時にさらされた一つの姿に，私はあまりにも執着している。私は愛するもののはかなさを知っている。整いすぎた顔にはわずかな変化も感じとれる。それを崩してゆく日々の影を見抜いてしまうのだ。（……）私にとって，年月は彼女の上でしか過ぎてゆかない。私の年齢に由るのだろう。彼女を知ったとき，彼女は若かったし，私は彼女が年取ってゆくのを決して見ることはないと思っていた。

> Je voudrais que cette belle femme laissât mon amour plus inconscient. Je suis trop attaché à une image exposée au temps. Je vois la fragilité de ce que j'aime. Sur un visage parfait, les nuances sont très sensibles : on devine l'ombre des jours qui vont le défaire. (. . . . . .) Pour moi, les années ne passent que sur elle. Cela tient à mon âge. Quand je l'ai connue, elle était jeune et j'ai cru que je ne la verrais jamais vieillir. (pp.7-9)

『クレール』の冒頭のこの文章から，『エヴァ』と同じく恋愛実験の場であることが判る。『エヴァ』では，男が愛を与えすぎ，接近しすぎた愛の悲劇が分析された。それに対し今取り上げている作品では，時間の押しつける変化を恐れる男が，女との距離をとることで永遠の恋愛を生きようとするのである。いわば前者が生活に恋愛が打ち倒されたものというなら，後者は生活と無縁に恋愛を生きようとするのである。

しかしこの不安定な段階を長く維持することは不可能である。虚妄で観念的な恋愛は，対象となっている人間が知覚しない間は生きつづけるけれど，人間の内面から外に出た以上，衰えざるをえないので

ある。その例として，若い頃の主人公と一時恋愛関係にあった女性ローラがいる。彼女は一緒に過ごした青春の三月に操をたて，結婚もせずその思い出を反芻しながら三十年を生きてきたのである。観念の自己増殖のみに身をまかせていた彼女は，主人公との唐突な再会によって，観念の基にあった恋愛がもう完全に変形し，まったく別物になってしまったことを悟ってしまう。いわば欺瞞に一生を奉げてしまったのである。

> 彼女は私と再会するべきではなかっただろう。人生のすぐれたもののみを保存しておくには，人生と馴れ合ってはならないのだ。それでは失望する。人生は，動揺し泥にまみれて充実している間だけ豊かなのだ。掌の窪みに混り気なしに取っておこうとすると，真水の一滴はおいしくない。

> Elle n'aurait pas dû me revoir. Il ne faut pas calculer avec la vie pour n'en retenir que l'excellent ; on est frustré. La vie n'est riche que dans sa plénitude agitée et bourbeuse. La goutte d'eau pure qu'on veut garder sans mélange au creux de la main est insipide. (p. 108)

現在の自分の鏡ともいうべきローラによって（小説としては御都合主義がみえすいて少しの効果もあげていないが），主人公は自省しなければならなくなる。自分の内面にのみ一個の人間を生かしておくということは，当の相手から選別したイメージを集めるだけのことである。それらを全部集めても，現実に生きる人間には対抗しえるはずもない。穴だらけの不完全でもろい像にすぎないのである。こんな人形に頼って人生を生きようとするものは，ローラのように人生から復讐を受けることになるだろう。かつての妻との関係と同様に，それは耐えがたいものである。

今の主人公は，クレールを以下のようにとらえている。「彼女の年齢も私たちの関係も，彼女を変えなかった。彼女は同じ額縁の中で，人生の外にいて，はっきりとした好みもなく，自分自身と絶縁することもなく，以前と同じである。だから彼女には完全さに似たぼんやりしたものがあるのだ。」《Son âge, nos relations ne l'ont pas changée ; elle est restée dans le même cadre, hors de la vie, sans goûts déclarés, sans rupture avec elle-même ; d'où, chez elle, ce vague qui est semblable à la perfection.》（p.48）こういう認識のままでは，クレールと別れようが付き合おうが，ローラの人生を模倣するだけである。だから主人公は，決定的な選別によって次の段階に進まなければならない。

今の恋愛を完全に否定し，クレールと実際的にも内面的にも離れるか，より強固な結び付きによる愛情関係に達する，つまり恋愛と生活とを統合するか，である。主人公に前者は不可能である。だから彼女を額縁の中から出し，人生の一員にしなければならない。クレールの期待よりは遅れて，主人公は結婚を決意する。

人生経験ゆえに女との幸福な生活を恐れていた男には，それを目差すための試練を経る必要がある。彼女がもっとも他人に知られたくなかった，それ故に親戚との付き合いも避け，田舎に引き籠もっていた，私生児であるという秘密を，二人が出会う前にすでに彼女の父親から聞いていたことを告げるのである。それによって自分のもっとも恐れる死がクレールを襲うかもしれない，と覚悟しながら。「かつて私はクレールに自分のことを決して話さなかった。（……）手加減なしで，無遠慮な会話，自己告白，あらゆる思想の開陳は，共有する愛のしるしそのものであることを私は疑わない。」《Autrefois, je ne parlais jamais de moi avec Claire et j'évitais les sujets austères qui pouvaient l'ennuyer. Je ne me doutais pas que la conversation sans ménagement, sans réserve, l'aveu de soi, la confession de toutes pensées sont le signe même de l'amour partagé ;》（p.145）そしてショックで倒れてしまったクレールに，父親を破滅させたのが彼女であると非難しさえするのである。

親しんでいた伯父が実の父であったという虚偽のせいで，自分を世間から隔離したクレールにとって，嘘は許しがたいものであった。だから本来なら主人公を許すことはできない。

だが主人公だけが生き方を否定するだけでは第二段階に進めない。クレールも今までの生き方を乗り越えねばならないのである。そして二人はより強い結びつきをえる。

多分彼女は結婚後も変わりはしなかった。私を失望させなかった。私も彼女について思い違いをしていなかった。しかし彼女は私にとって完全に違う人間になっている。私が勝手につくりあげた像や抽象ではもうなく，現実的な独立生活を確保した，明確な性格と独自の感覚を備えた，あらゆる行為が私の心を打つような，生き生きとはつらつとした一人の人間である。

Sans doute, elle n'a pas changé depuis notre mariage, elle ne m'a pas déçu, je ne m'étais pas trompé sur elle ; cependant, elle est pour moi un être entièrement différent. Ce n'est plus une image que je façonne à mon gré, une abstraction, mais une personne vivante, expressive, qui affirme son existence indépendante et réelle, qui a un caractère dessiné, une sensibilité propre, et dont tous les mouvements me touchent. (pp.127-8)

結婚前の別々に暮していた頃には，自宅に戻ればクレールを忘れることもあったのに，今ではクレールがしっかりと自分の中に根をおろしてしまっている。「彼女は私の中に入って，私の存在と混りあった。彼女は私の均衡の中心であり，私に必要である」。《Elle est entrée en moi et mélangée à mon existence ; elle est le centre de mon équilibre, elle m'est nécessaire.》(p.177)一体化したばかりでなく，クレールの目で見，彼女の感覚で感じるようにさえなる。「私が歓びの感情を覚えるのは，不完全な翻訳で読むように，彼女を通してであった。」《C'est à travers elle, et comme par une traduction incomplète que j'ai le sentiment de la joie.》(p.149)

II

前作『エヴァ』の中で主人公が書いていた偽りの日記は，実際の家庭生活と無縁に，妻を無視して，架空の夫婦愛を記述したものであった。自分の悲惨な夫婦生活を忘れ，現実を逃避するためのフィクションであった。だから作品中から排除された現実のエヴァと，ベルナールの記述する文章中の幻影のエヴァとの間には，まったく越えがたい隔たりがあった。

それに対して『クレール』の中で主人公が書き記す手記は，もっとも美しかったクレールを，そして彼女との非現実的，理想的な愛を永遠に定着させることを，取りあえずの目的としていた。つまり非常にもろい基盤にたてられた第一段階の愛を真空パックするためであった。

だからそれは結婚してすぐに書き始められることになる。つまり強固な基礎の上につくられた家庭ではあるが，現実との接触がある以上様々な障害にぶつかり，ひょっとしたら壊れるかもしれない夫婦関係が成立したから，取りかかったのである。

家庭的な幸福をえた二人は，内面のもっとも秘やかな声までも互いに通じあうようになる。現実の生活なのに，主人公のかつての恐怖とは裏腹に，時は流れず，濃密な持続の中にいる。永遠が約束され，死は決定的に不在になったようである。「人生が私たちにもたらすものはみんな良い。私はいつもそれを受け入れたい。選ぶのは私ではない。」《Tout ce que la vie nous apporte est bon. Je veux l'accepter toujours. Ce n'est pas à moi de choisir.》(p.218) こういう肯定的な人生観を受け入れたから，「本でも書こうと空想している怠け者の少年」《l'enfant paresseux qui rêvait d'écrire des livres.》(p.45) のように綴り出すのである。

人間は無限で，表現することができない。しかしながら書きたいという考えが私にやってきたのは，自分を観察しながらではない。私が考えたり感じたりしたことはほとんどすべて外から，とくに私の生活に所属している少数の人々によって与えられたのである。

L'homme est infini et impossible à représenter. Pourtant, ce n'est pas en me regardant que l'idée m'est venue d'écrire. Presque tout ce que j'ai pensé et ressenti m'a été fourni du dehors et surtout par un petit groupe de gens qui font partie de ma vie. (p. 107)

だから『エヴァ』の主人公ベルナールが妻の目から日記を隠そうと努めたのと大きく異なり，主人公はクレールに読んできかせさえするのである。彼女との愛の第一段階を叙述する以上，彼女は最上の読者なのである。「クレールがこれらの紙片を喜んで聞

いてくれるなら，私は安心するだろう」。《si Claire prenait plaisir à entendre ces pages, je serais tranquille.》(p.204)そして自分たちの過去を物語りつつ，クレールに客観的で冷静な批評を求めさえするのである。

「私はきみに小説を読んでいる。他人のようなつもりで聞いてくれ。私が作者であることや，登場人物や事件や思想さえ見知ったものであることを忘れておくれ。価値があるのは虚構だけだからね。真実は好奇心にみちた興味を正しくあたえる。この本の中で，語り手は自分の思い出を語っているようにみえる。読者にとっては，当然想像上の思い出となる。作者と読者の間の，相互的な錯覚遊びは，きみが現実を見失なってくれないと，壊れてしまう……」

—Je te lis un roman. Je veux dire que tu dois m'écouter comme si tu étais une étrangère. Oublie que je suis l'auteur, que les personnages, les événements et même les pensées te sont connus. Il n'y a que la fiction qui ait une valeur, n'est-ce pas? La vérité offre tout juste un intérêt de curiosité. Dans ce livre, le narrateur a l'air de raconter ses souvenirs. Pour le lecteur, il s'agit naturellement de souvenirs imaginaires. Ce jeu d'illusions réciproques entre l'auteur et le lecteur est détruit si tu ne perds pas de vue la réalité. . . (p.205)

作者の誕生である。何か月か前に散歩の途中で，主人公は突然啓示をえた。「数年の間に私に起ったことを，どうしても再現しなければならないかのように物語る一冊の本を書くということを思いついた。」《Je venais d'avoir l'idée d'écrire ce livre où je raconte ce qui m'est advenu pendant quelques années, comme s'il fallait le restituer.》(p.192) その啓示をたった一人の読者のために実現しようとしているのだ。入植者であった何十年かを突如忘却し，主人公は一人の作家になるのである。

だがこの本は成功しなかった。彼らの愛に試練が必要であったように，作家になるのにも試練を必要とするのである。

つまり自分たちを再現しようとするこの試みは，少しもその意図を達成できなかったのである。主人公が興奮して読み進むにつれ，クレールは落ち込み，うつろになってしまう。彼の再現した過去が，彼女にとっては共有しているはずの過去では少しもなかったのだ。ちょうど愛の第一段階が薄皮をへだてて現実を生きていたように，小説の第一段階では，言葉はむしろ現実を再現する壁になっているのである。

この点で『エヴァ』とはまったく異なっている。前作中で日記という体裁で主人公の書きつつあった小説は，私たちの目の前にある『エヴァ』に結晶した。しかし『クレール』の中で書き進められていた小説は少しも結実しなかったのである。

『エヴァ』では，若い日に書いた小説で失敗した男が，小説は書かないと様々に言明しつつ，潜在的な欲望を，妻が逃げ出すことで実現した。小説と女性の二項対立で女性を選択した男が，女性を失うことによって小説を手にしたのである。

『クレール』では一途に愛してくれる女性の愛をえたことで，突如作家としての使命を自覚する。だが二人が自らの意志で離れることは考えられない以上，『エヴァ』の論理でいくなら，主人公は小説を書くことはできないのだ。嫉妬深いミューズ神は幸せな人間が作家になるのを望まない。

しかし『エヴァ』と『クレール』は双児である。あまりに唐突にクレールが死んでしまう。ミューズに捧げる最大の貢ぎ物であった。そして主人公は現実との接点を失ってしまうのだ。「私は人生と断絶した印象を経験していた。クレールのように，私もこの地上からいなくなっていた。」《j'éprouvais une impression de rupture avec la vie. Comme Claire, j'étais absent de la terre.》(p.229)

主人公は，顔を失い，肉体を失い，その存在が消え去った。一言でいうなら非人間化され，一個の目になった。これによって主人公は作者になったのである。

主人公は現実へ一歩踏み込むことで愛の第二段階に到った。それと反対に現実から一歩身を離すことで，小説の第二段階に達することができたのである。

〔注〕

1．テクストはGrasset版（1984）を用い，該当ページのみを示す。

2．愛知工業大学"研究報告"No.22, pp.29～34, 1987.

3．J. Chardonne : *Eva*, 150-1, Albin Michel, 1983.

なお，各種文学史の一節や評論集の一部で取り扱われることはあっても，シャルドンヌに一冊をあてた書物は以下の三冊だけである。

GUITARD-AUVISTE (G.) : *La Vie de Jacques Chardonne et son art, Grasset, 1953.*

— : *Jacques Chardonne ou l'incandescence sous le givre,* Olivier Orban, 1984.

VANDROMME (Pol) : *Jacques Chardonne, c'est beaucoup plus que Chardonne,* Vitte, 1962.

（受理　昭和63年1月25日）